

渋谷清視

童謡さんぽ道 上

鳩の森書房

渋谷清視

童謡さんぽ道
上

鳩の森書房

著者紹介

渋谷清視（しぶや・きよみ）著述業・児童文化研究家・児童文学評論家。1929年、京都府綾部市生まれ。兵庫県豊岡市にて、公立学校教師を勤め、東京へ移住してからは、教育科学研究所編『教育』（国土社）、日本作文の会編『作文と教育』（百合出版株式会社）の、それぞれ機関誌編集部勤務したことがある。1957年、日本文学教育連盟の創立に参加し、以後15年間、同会の事務局長（常任委員）を担当した。現在は、日本児童文学者協会・日本子どもの本研究会に所属。新児童文化研究所編『子どもと文化』（鳩の森書房）の責任編集者を担当するほか、東放学園放送芸術家・千葉大学教育学部に出講している。主要著書に、『子どもの本のひろば』（有信堂）『子どものための文学の本』（金の星社）『にっぽん子どもの詩』『絵本とおはなし』『子どもの本と読書を考える』（以上鳩の森書房）などがある。

現住所 東京都国分寺市北町4-16-7

童謡さんぽ道上

日本音楽著作権協会許諾番号 第7908073号

1979年7月初版

著者	渋谷清視
発行者	道本裕信
発行所	鳩の森書房 東京都新宿区天神町62番地 (03)268-2581(代) 振東0-18511
印刷所	福田印刷

* 定価はカバーに表示してあります
乱丁・落丁本はお取りかえします。

1979©渋谷清視

はじめに

おそらく人には誰でも、喜ばしいときに、腹だたしいときに、哀しいときに、そしてまた楽しい気分であるときなどに、思わず口ずさんでいる“うた”がある。

なかには、それが万葉集などの歌集や芭蕉などの句のなかの、それぞれ一作品だったりする人もあろう。しかし普通は、民謡であったり、学校の校歌・寮歌だったり、また軍歌であることが多いだろう。また幼少時代からおぼえ蓄（たくわ）えてきている、童謡・唱歌や流行歌などである人もいよう。人はそのとき、それを無心に口ずさむことで、それぞれ自己の感情に、酔ったり増幅させたり、またはそれを、まぎらしたり慰めたり励ましたり解放させたりなど、することになるのである。そういう意味では、人にはそれぞれ自分の生活とところを満たす、懐かしい“うた”があり、そうしてそれらの“うた”は、ときには人間にとって日々の生活のそれはまた、人生における、潤滑油（じゅんか）の役割を、はたしているのに気づくことができる。

本書は、そうした懐かしい“うた”のなかから、“唱歌”“童謡”などと呼ばれてきた、いわゆる“子どもの歌”九十一編について、それぞれの作品の特徴や誕生の事情などを中心にして、わたしなりの解説を試みたものである。“子どもの歌”への理解・鑑賞や愛好を、ふかめるうえでの一助になれば、著者としてはさいわいである。

もくじ

はじめに

春のうた

- 手まり歌（武内俊子）／伝承性いかして愛らしくって上品に 8
- どこかで春が（百田宗治）／野山に息づく春の音がする 10
- うれしいひな祭り（サトウ ハチロー）／はずむ心を情趣ゆたかに 14
- 春が来た（高野辰之）／のどかな気分にあたる迎春賛歌 18
- めだかの学校（茶木滋）／その生態をすなおに楽しくうたう 22
- 花かげ（大村主計）／月に語る「姉さん恋し」のころ 24
- ことりのうた（与田準一）／聞えてくるような小鳥のさえずり 26
- チューリップ（日本教育音楽協会）／花ひらくさまを明るくかわいらしく 28
- なかよし小道（三苦やすし）／ほほえましい幼年の日の仲よし風景 30
- こいのぼり（作詞者不詳）／青空を泳ぐ鯉を子どもらしい感覚で 34
- げんこつやまのたぬきさん（香山美子）／伝承童謡を生かした現代子ども遊びうた 36
- おすもうくまちゃん（佐藤義美）／幼児の遊ぶ姿を明るく元気よく 40

おかあさん（田中ナナ）／あたたかくふれあう母親と子どもの心 42
しゃぼん玉（野口雨情）／いかにも春らしいのどかな風物詩 44

夏のうた

みかんの花咲く丘（加藤省吾）／明るい南国的情緒と甘いノスタルジアと 48

あめふりくまのこ（鶴見正夫）／くまのこをかわいらしくユーモラスに 50

おなかのへるうた（阪田寛夫）／なまの生活実感とことばを生かした新鮮さ 54

蛙の笛（齊藤信夫）／農村の夜の平和でのどかなひと時を 56

この道（北原白秋）／追憶のこころを懐しく格調高く 60

うみ（林柳波）／おおらかな気もちと憧れのこころと 62

おさるがふねをかきました（まど・みちお）／ひたむきさの中にあるこっけいさ 64

たなばたさま（林柳波）／“星祭り”の名にふさわしく美しく 66

ないしょ話（結城よしを）／無邪気な坊やのたのみごとを明るく 68

かわいいかくれんぼ（サトウ ハチロー）／なんともかわいらしくてほほえましくも 72

アイスクリームの歌（佐藤義美）／ふしぎな魅力に満ちたりたこころ 76

金魚の昼寝（鹿島鳴秋）／夏の午後のけだるいひと時に 80

秋のうた

ちいさい秋みつけた（サトウ ハチロー）／せん細で愛らしく寂しく奥ゆかしく

84

森の小人（山川清Ⅱ田中一郎）／快適なりズム感にのってにぎやかに

88

あひるのスリッパ（武鹿悦子）／生態の特色をたくみにとらえて歌う

92

赤とんぼ（三木露風）／姐やを思いだし懐かしむころの濃やかさ

94

やぎのゆうびん（まど・みちを）／食いしんぼうの山羊さんたちのおかしさ

98

おにぎりころりん（まど・みちを）／まことに鮮やかな母さんの手さばき

102

汽車ぼっぼ（本居長世）／懐かしの日本のSLをコミカルに

104

月の沙漠（加藤まさを）／想像を呼ぶ美しくて寂しいイメージと物語

106

どんぐりころころ（青木存義）／幼児と感情と想像力を楽しませるおもしろさ

110

やくそく（都築益世）／あすへの期待と友だちへの信頼感と

112

まっかな秋（薩摩忠）／あざやかに燃える山野の美をたたえる

114

冬のうた

たきび（巽聖歌）／ここちよいリズム感がいだかせる暖か味

118

手をつなごう（中川李枝子）／幼児の興味をいかしたりズム遊び歌

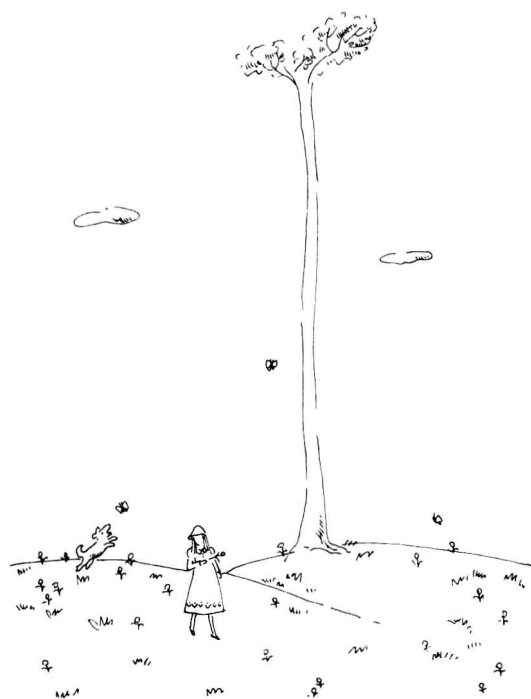
120

おもちゃのチャチャチャ（野坂昭如）／にぎやかなお祭りひろばのイメージ

124

- ジングルベル（高田三九三）／速いテンポによって軽快で陽気に
 128
 お正月（東くめ）／子どもの正月を待つところ率直に
 132
 ちんちん千鳥（北原白秋）／寒夜に啼く千鳥への思いを子もり歌ふうにおはなしゆびさん（香山美子）／ユーモラスに歌うほのぼのとした家族愛
 134
 おはなしゆびさん（香山美子）／ユーモラスに歌うほのぼのとした家族愛
 138
 大きなたいこ（小林純一）／リズムカルに歌い遊ぶ中で創造力を養う
 142
 ちかてつ（名村宏）／いかにも子どもらしい認識とことば表現で
 144
 浜千鳥（鹿島鳴秋）／親を恋慕うて鳴く鳥の哀しさ
 148
 いぬのおまわりさん（佐藤義美）／かわいらしくつていじらしくつて同情したくなる
 150
 こわれたすいどう（谷川俊太郎）／デリケートでゆたかなことば感覚の冴え
 154
 こどものがくたい（椿真太郎）／張りきってにぎやかに楽しそうに
 156

春のうた



式内俊子

(作曲/松島つね)

一、てんてんてん

天神さまのお祭り

てんてん手まりを買いました

てんてん手まりはどこでつく

梅のお花の下でつく 下でつく

二、てんてんてん

天神さまの石段は

だんだんかぞえていくつある

だんだんかぞえて二十段

段の数ほどつきましよう つきましよう



“手まり”とは、綿をシンにして、糸をあつく巻きつけ、その表面には美しい色の糸を綾（あや）にかがって作った“まり”のことで、“手鞠”あるいは“手毬”という漢字を用いた。

江戸時代の初めころからは、シンのなかに、貝殻や砂などをいれて、音が出るようにしたり、鋸屑（のこくず）などを包んで、はねる力を強めるなどの、工夫がなされてきたという。

この“まり”を、女の子が縁側などで向きあって、ひざを立てて手でつきあうのが、“手まり遊び”である。明治の中期ごろから、西洋のゴムまりが輸入され、手まり遊びは立ってするようになった。その手まり遊びのときに歌うのが、いわゆる“手まり歌”である。

日本の伝承童謡のなかには、例えば「むこう横町のおいなりさんへ……」「山寺のおしょうさんは……」や、「あんたがたどこさ……」などのように、有名な“手まり歌”が、今に伝えられている。ここに掲載の『手まり歌』は、創作童謡であるが、自然に日本の旋法が用いられて、愛らしく上品にまとめられているために、まるで伝承童謡のメロディーを聞いているような思いにさせられる。詞・曲ともに、国民学校音楽教科書（文部省著作）の昭和十七年三月に発行された、『初等科音楽一』（現在の小学校三年用）に発表されたものである。

作詞の武内俊子（たけうちとしこ・明治三十八年―昭和二十年）は、広島県三原市生まれの童謡詩人。野口雨情に師事したが、昭和十年代にキングレコードで発表された、『赤い帽子 白い帽子』『かもめの水兵さん』『りんごのひとりごと』や『船頭さん』などの作詞者として有名である。作曲の松島つね（明治三十二年生まれ）は、国民学校音楽教科書（前出）の編集委員のひとりに任命されていて、そこで『おうま』（林柳波・詞）ほかの作曲をしている。

百田宗治

(作曲/草川 信)

どこかで 春が

生まれてる

どこかで水が

ながれ出す

どこかで雲雀が

啼いている

どこかで芽の出る

音がする

山の三月

東風吹いて

どこかで 春が

うまれてる

日あたりのよい道ばたで、きょう初めて土筆（つくし）を見たとか、堤や藪（やぶ）かげの土中から、落（ふき）のとうが花穂をもたげていた——などと、毎年くりかえして話題になるこのころに、『早春賦』『春よ来い』などといっしょに、よく歌われつづけてきた童謡である。

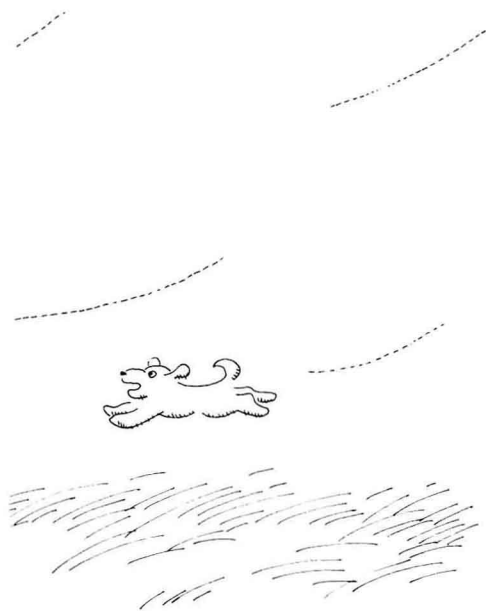
大正十二年三月、『小学男生』（実業之日本社）という雑誌に詩が発表された。作曲された年月は定かではないが、詩の発表と、それほどかけ離れていない時期であったと推測できる。

第三連目にある「東風（こち）」とは、いわゆる雅語で、平安朝時代の歌文に用いられた、やまことばである。字が示すとおり、東から吹くやわらかい風のことなのだが、のどかで暖かい春風とは、少し感じがちがいがい、まだ寒さの幾分ふくまれている感じの風のことである。その「東風」という雅語をのぞけば、この童謡は、子どもにもよくわかることばで、野山に春の生まれつつある気配を、素朴にとらえて歌っている。

作詞の百田宗治（ももたそうじ・明治二十六年―昭和三十年）は、民衆詩派の詩人として有名。少年詩や童謡も書き、戦前は生活綴方（つづりかた）の雑誌『工程』『綴方学校』を発刊・主宰したが、特に「児童生活詩」を提唱し、全国各地の熱心な教師たちと接触・協力して、子どもみずから書く

詩の指導と、その運動の発展につくした功績は大きい。

作曲の草川信（くさかわしん・明治二十六年―昭和二十三年）は、成田為三・弘田龍太郎らと、雑誌『赤い鳥』の童謡運動に参加した。ご子息の誠氏の思い出によると、この『どこかで春が』を、『揺籃（ゆりかご）のうた』（北原白秋・詞）や『風』（西条八十・訳詞）などとともに、ご本人はともも気にいって、よくバイオリンでひいていたという。ほかに『夕焼小焼』（中村雨紅・詞）『汽車ポッポ』（富原薫・詞）などの有名曲がある。





サトウ ハチロー

(作曲／河村光陽)

一、あかりをつけましょ　ぼんぼりに

お花をあげましょ　桃の花

五人ばやしの　笛太鼓

今日はたのしい　ひな祭り

二、お内裏さまと　おひなさま

二人ならんで　すまし顔

お嫁にいらした　姉さまに

よく似た官女の　白い顔

三、金のびょうぶに　映る灯を

かすかにゆする　春の風

すこし白酒　召されたか

赤いお顔の　右大臣

四、着物を着かえて　帯しめて

今日はわたしも　晴れ姿